



【写真 Photographs】
海の観音さまに会いに行く
Moomin Family goes on a picnic to see Kannon
2014
撮影:宮沢晋、飯山由貴

「あなたの本当の家を探しに行く」
10月24日 夜
「この家はわたしの本当の家じゃない」と泣き出して
もう線がきれている電話から、
「本当の家を探しにパジャマで外に出ようとするので
暗い庭先で、今日は雨が降っているから天気の良い日に行
こうと声をかける。
一緒に「本当の家」を探したい気持ちになるが、母が顔を
かめて首を横に振るのであきらめる。
確かに明日は仕事もあるし、外は寒そうだし
こういうときどういう対応をしたらいいのかいつもわから
ない。
では、わたしたちがいま暮らしているのは「いつか」
なんだろうか。
11月18日 夜
あなたの本当の家を探しにいく。

幻聴や幻覚をもつ家族が具合が悪くなったとき、わたし
ち家族は多少うんざりしつつ、戸惑いつつ、落ち着くのを
待つ。彼女はこうしてこうなるのか考える、さっきの会話
が頭に障ったんだらうかと。それもあるのかもしれないが、傍
目には何もなくても具合が悪くなる時もある。よくわからない。
彼女はあの有名なアーティストのように自分に見えるものを
絵画にしたりはできない。「アウトサイダー・アート」とよ
ばれる芸術の展覧会が開かれていたりするけれど、精神に障
害の言葉はあまりつかないが、持った人が、幻聴や幻
覚を「表現」できること自体がもししたら希有なこと、表
現の仕方もうまく見つけられないまま、投薬し生活している人
のほうが多数なかもしれない。私自身は大学で絵を描い
たり造形する人に囲まれて生活していたから、感覚が麻痺し
ていたんだと思う。だれでも何かしら作ったりできると思い
こんでいたが、そうでもなく、できることできないことが
人それぞれあると、妹と数年前に一緒に暮らしてみても
づく。そして、それを互いに補うことができることも。

彼女が具合が悪くなったときに語る言葉は不思議だ。あの日
は、ずっと自分が生まれ育った家に暮らしているのに、本当
の家を探しに外に出かけようとした。いったんその世界に
入ると、家族がかける言葉は彼女に届いていないのかよくわ
からないし、とても強い力で行動するので3人がかりで引
き止める。引き止められないときもある。そもそのときの
彼女の記憶とか経験はどうなっているのだろうか。彼女の言
葉を本音でやってみたら、なにかわかるのだろうか。家族の
ひとりや二つと聞かないとまた入院させるよという言
葉がでてしまうくらい、老人と病人と一緒に暮らすことに疲
れている。たぶんそんな家族はほかにも沢山いるんだらう。
わたしたちが暮らす街は田舎なせいか、すぐに入院できる
病院は、患者が幻聴や幻覚の症状があると何をやるかわか
らないし、スタッフの目が行き届かないという理由で保護室
に入れる。都会の病院がどうかは知らない。保護室というの
は、あべたら幻覚をみたりすると入れられる部屋で、そこ
にはなにもない。彼女の主治医もたまに、入院した
いんですか?と、圧力をかける意味でその言葉を使う。し
かし後で、あのときこう言われてつらかった、と話したら、決し
て脅したりはしなかった。そういうふうには聞いたら悪
かった、と主治医は謝った。しかし、それではまるで
幻聴や幻覚があること自体が罪のようだ。彼女は父母が死
んだあと1人で生きていけるのか不安に思っている。わた
しは「八月の鯨」のように暮らすように朝ごはんを食べなが
ら声をかける。これですこしは不安が取まるのだからかと
思いながら、わたしがいつか家族とはなれて暮らすらうと、
老人になつたら同じく老人の彼女と一緒に暮らすらうと、
投薬以外の、人生におけるなか、精神の病気を持つ人
間に強く影響するのはなんとかわかる。恋とか友達とか
夢とか趣味とか。言葉にすると陳腐だけど、彼女は家と病院
とコンビニとショッピングモールが生活圏で、デイケアに
行くようになることが、ここ数年の彼女の彼女の目標だ。彼女
に、人生におけるなか、が、いつおきるのか、わたしも待っ
ている。でもいま、わたしたちはこうやって一緒にみ出
すこともできる。

*東京都福祉保健局特設ホームページ「ハートシティ東京」より
(<https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/tokyohheart/shougai/seishin.html>)

【関連動画】
飯山由貴インタビュー動画
配信予定(東京都人権プラザホームページ内で告知)



※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、会期変更・入場制
限の可能性があります。また、ご来館にあたりましては、感染拡大防止策
にご協力をお願いいたします。詳細は東京都人権プラザホームページで
ご確認ください。

【アクセス】
○都営三田線 芝公園駅 A1出口 から徒歩3分
(エレベーターはA3出口)
○都営浅草線・都営大江戸線 大門駅 A3出口 から徒歩7分
(エレベーターはA1出口)
○JR線・東京モノレール 浜松町駅 南口(金杉橋方面)から徒歩8分
(エレベーターの利用は改札で駅係員にお尋ねください)
※身体障害者の方や、公共交通機関の利用が難しい方の専用駐車
スペースをご用意していますので、事前にご連絡ください。

【お問い合わせ】
東京都人権プラザ
〒105-0014 東京都港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1・2F
TEL: 03-6722-0123
URL: <https://www.tokyo-hrp.jp/>



飯山由貴(いいやま・ゆき)
美術作家。神奈川県生まれ。東京都を拠点に活動。
映像作品の制作と同時に、記録物やテキストなどから構成されたイン
スタレーションを制作している。過去の記録や人への取材を糸口
に、個人と社会、および歴史との相互関係を考察し、社会的なステイ
グマが作られる過程と、協力者によってその経験が語りなおされる
こと、作りなおされることによる痛みと回復に関心を持っている。近年
は多様な背景を持つ市民や支援者、アーティスト、専門家と協
し制作を行っている。近年の主な展覧会として、2022年「地球がま
わる音を聴く:パンデミック以降のウェルビーイング」(森美術館、東京)、
2020年「ヨコハマトリエンナーレ2020 AFTERGLOW—光の破片
をつかまえる」(横浜美術館、神奈川県)、2017年「コンニチハ技術トシ
テ / 美術 Nice to meet you ARTECHNIK」(せんだいメディアテーク、
宮城)、「Words coming out of the wards」(ART HUB三軒庄、福岡)、
2015年「APMoA Project, ARCH vol.16:飯山由貴 Temporary
home, Final home」(愛知県美術館、愛知)、2014年「あなたの本
当の家を探しにいく / ムーミン一家になって海の観音さまに会いにい
く」(WAITINGROOM、東京)

YUKI IYAYAMA
“We walk and
talk to search
your true home”
東京都人権プラザ企画展
飯山由貴
あなたの
本当の家を
探して行く